

平成27年度 第20回講演会 記録

日 時	平成28年2月27日(土) 13:00～16:00
会 場	此花会館 梅香殿 大ホール
講 師	舞根森里海研究所長(本講座のコーディネーター) 田中 克先生
演 題	「森里海連環学」による列島再生への道
備 考	参加者数 171名、 記録 中垣 尚治

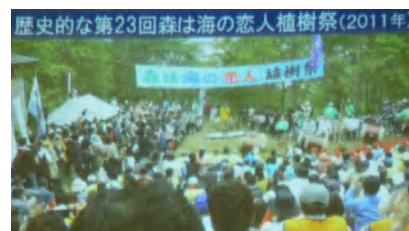
第1章 「森里海連環学」とは

今年度の最終講義を迎えた。今年度からスタートしたテーマ「森里海連環学」の目指しているミッションについて、改めて整理して説明された。食料・資源・エネルギーなど地球が悲鳴を上げている課題の中で、環境問題が最重要と考えておられる。先生自身の研究テーマであったヒラメの稚魚の研究を通じて日本全国を巡る中で、森林域が海の生物を育てているとの結論に至った。科学的に論じる「森川海連環学」では環境問題が解決できない。森と海の間に住む“里＝人間”の考え方が変わらなければならないという「森里海連環学」が提唱され、自然科学と文系学問の融合が最重要である。

有明海の水質汚染、ボルネオのパームヤシによる自然林消滅などの事例を交えて、森と海の間にいる人間の行動によって環境が左右されることが大きな問題である。



震災の年も開催された植樹祭



第2章 「東日本大震災と森里海連環」

未曾有の津波に襲われ、東北太平洋沿岸部に甚大な被害を及ぼした。舞根湾奥部で牡蠣養殖業を営む「森は海の恋人」運動の提唱者の畠山重篤さんも、全ての漁具が流されて牡蠣の養殖の再開は危ぶまれた。ところが森里海連環学の関係者等の調査により、プランクトン類が速やかに復活していることが分かった。試しに浮かべた筏では、従来より早く牡蠣やホタテが成長し、大きさも従来よりも大きく育つことが分かった。これは上流部の森が健在であり、そこから豊富な栄養分が海に注がれているためであることが分かった。また湾岸部が津波によって人造物が消滅し、昔の自然に戻ったこととも関連がある。現在も陸部＝人間にとってまだ大変な状況にあるが、海の生物は急速に復活・再生している。不幸な自然災害であったが、森里海連環の重要性が実証されたし、その中で里＝人間の意識・考え方がキーであることが改めて知らされた。

環境省が「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトを立ち上げた。この活動を通じて“いのちのふるさと海と生きる”社会の創生を目指す。

取り戻したい風景



「H27年度の修了式」

講義終了後、今年度の修了式を行った。田中先生から来年度以降の狙いや観察会の概要の説明を頂いた。斎藤代表理事から感謝の言葉、長野自然学代表から全ての方への謝辞を述べ、「今日の日はさようなら」の歌を全員で合唱して終了した。



